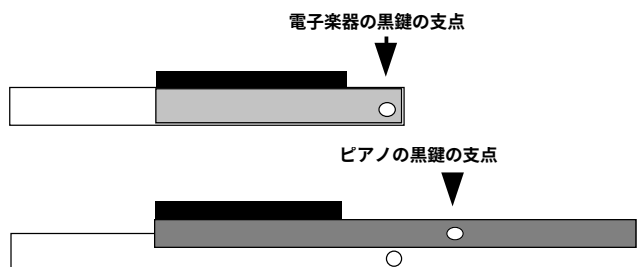


ピアノのお稽古 (2)

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

ピアノを初めて弾く時最初に触れるキーは「白鍵」です。ところが最初に弾く曲はあの「黒鍵のエチュード」である「猫踏んじゃった」ですね。

最近の電子キーボードはかなりこの黒鍵について改良されていますが、いわゆるミニ・キーボードではそのサイズからくる理由で生演奏は極めて難しいのです。



上の図でおわかりのように「ちゃんとした」ピアノでは白鍵と黒鍵の支点の位置が変えてあり、作用点（ハンマー・アクションに力を伝える点）にかかる力が白鍵でも黒鍵でも同じになるようにしてあります。ただ、黒鍵は白鍵より短いため、黒鍵の奥の方ではキーがやや重くなります。

ところが、電子キーボードの多くは白鍵も黒鍵も同じ支点で支えていますので、当然黒鍵の方が重くなります。しかもストロークが短いのでF#Majorのようなコードを弾くと真ん中のBbの音が不発になることが多いのです。

宿命といえば電子キーボードにはもう一つの宿命があります。それはキーボードが力学的なインターフェイスではなく、単なる電気スイッチであるため、猫が踏んでも指で弾いても鍵盤の一定の深さでスイッチがオンになるということです。通常のピアノですと力学的なエネルギーの伝達が最終的にはハンマーの初速度をコントロールします。このことは伝えるエネルギーによって動作を起こしてから発音するまでの時間が変わっていることを意味します。通常フォルテでは早めに発音し、ピアノでは遅めに発音します。これを昔から「手応え」と言ってきました。そうなんです電子キーボードにはこの「手応え」がないのです。

私はゴルフのシングルプレーヤーですが（プレーした回数がシングルという意味）、ゴルフで飛距離を必要とするときはクラブのヘッドのスピードが決め手になることは経験的にわかります。同じヘッドスピードを出すた

めには、短いクラブならいっそう力が必要ですね。黒鍵はこの短いクラブのように力のいるキーなのです。もし、ピアノに黒鍵が無ければかなり、ピアノの演奏は楽なものになるでしょう。

最近の電子キーボードは「グレードハンマー鍵盤」とか、「グランドピアノアクション」を採用した高級品も出てきましたが、小学生が学校で使うキーボードは実は大変演奏の難しいキーボードであることを知っておいて欲しいのです。ですからコンピュータに接続するキーボードでは、キーベロシティをon/offできるものが良いでしょう。

最初のお稽古に用いる教材は楽譜からではなく耳から入った教材を使用します。このことは大変重要なポイントで、ともすればピアノは「バイエル」からと思われがちですが、本場のドイツ人も知らないバイエル（これは実際にヨーロッパの音大の学長、学部長にインタビューして判明）よりも、知っている曲のイメージを実現してゆく方が教育的だからです。

こういうと「待ってました」とばかりに「ポピュラー音楽」でピアノのお稽古をと早とちりしないで下さい。

最近のポピュラーは1拍を細分化した8ビートや16ビートのものが多いですから、情報量が多すぎるのです。ピアノでも何でも「易→難」の流れを情報量でみると「少→多」であり、内容でみると「単純→複雑」なのです。ですからいきなり情報量の多い複雑なポップスより単純明快な童謡のようなものが良いと思われます。勿論ポップスにも「ワンノート・ボッサ」のようなシンプルなものもありますが・・・

ドイツのラインランドファルツ州ではポータサウンドやポータトーンのようなミニキーボードを授業に導入しています。ドイツの進歩的な授業のパターンは「ヘーレン・ジンゲン・シュピーレン」という順番に行われます。つまり、まず「聞いて」「歌って」「弾く」という順番なのです。面白いことにこのシステムを開発したのは日本人なんだそうで、マインツにある、アカデミーがこのシステムを使った教科書を出版したり、研究授業をしたりしています。

このシステムでは、最初の曲は楽譜を使いません。まず耳から覚えます。その次はもう歌っています。

"Wir singen C,C,C"で始まるこの歌は日本語で歌うと「さあ、ドドド」となってしまうのでしょうか？次号ではこのドイツのシステムをとりあげます。